

〈論文〉

ライフ・ラーニング・アカデミー —— 未成年犯罪者のためのチャーター・スクール ——

うのうら ひろし
鵜 浦 裕

ディランシー・ストリート・ファウンデーション

1998年2月、サンフランシスコ統合学校区教育委員会はライフ・ラーニング・アカデミーのチャーター申請を全会一致で承認した。申請によれば、同校は高校生に相当する学齢者(14~18歳)のなかで、未成年裁判システムで判決を受けた、あるいは受けそうな青少年を対象とする。サンフランシスコ統合学校区の必要条件を満たすカリキュラムを実施し、正式な卒業証書を授与するチャーター・スクールである。

ミッション・ステートメントを見ると、学習のための安全な環境で次のような目標を「高度な期待と基準」で追求することになっている。

精神的、情緒的な成長

体格と価値観の発達

最新の教育的、科学技術的な機器を使用する学習

コミュニティー・サービスや(個人と社会の)相互的な回復

コミュニティーに根ざす拡大家族的雰囲気

文化的多様性の理解

さらに、いろいろなプロジェクトに基づく学習によって、未成年に動機をあたえ、学習をさせ、責任感、判断力、技能を身につける機会をあたえ、成人として仕事ができるようにする。平たく言えば、ライフ・ラーニング・アカデミーはスコーンの焼き方、製材の運び方、自動車修理の仕方を数学や歴史や科学や英語といっしょに教えることによって、もっとも常習的かつ暴力的な未成年犯罪者を社会の一員としての誇りをもつ生産者に変身させ、もう一度世間に送り出す学校だ。

教育委員スティーブ・フィリップスは「これらの子どもたちに教育の機会をあたえられなかったことが、教育委員会の唯一最大の不満でした」と新聞インタビューに答えている。さらに続けて「こんなすごい公立学校は見たことがありません。これまで無視されてきた生徒たちが学べるように、少しでも貢献したいと思います。これらの生徒たちに教育を与えるための申請書を見たときには、ほんとうに喜びました」と。

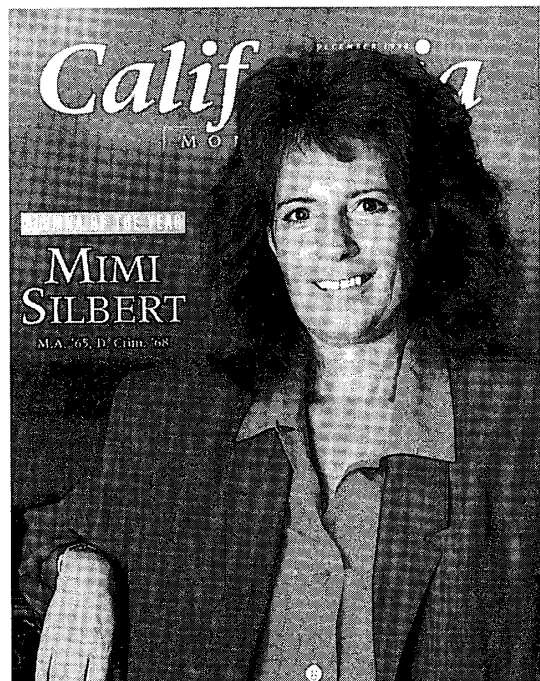
もう一人の教育委員ジル・ウィンズはインタビューに次のように答えた。

ライフ・ラーニング・アカデミーはサンフランシスコで私が心から応援するチャーター・スクールです。エジソン・チャーター・アカデミーとちがいで、同校は公立学校システムの基盤を弱くするというより、むしろそれを支えるタイプのチャーター・スクールだからです。その生徒のなかには、本来ならば刑務所にいる子どもたちがいます。残念ながら刑務所に学校はありません。したがって今の公立学校システムは彼らに教育を与えることができなかつたのです。私たちには彼らを教育する必要があつたのですが、残念なことにそういう子どもたちをずっと無視してきたのです。

同校には学校区の大きな欠落を補う可能性が秘められていたからこそ、サンフランシスコ統合学校区教育委員会は全会一致で同校のチャーター申請を認可したのである。たとえばチャーター・スクールに資金を「横流し」しているとまで非難されていたとしても。

申請が認可されたとき、校長就任予定者のミニ・シルバートは「いつの日か、6,000人くらい応募するような学校になるわ。楽しい、わくわくする、生産的な場所だもの」と新聞インタビューに答えている。しかし彼女が代表をつとめる次の組織を知れば、これが決してほらではないことがわかる。

同校を管理・運営するのは、ディランシー・ストリート・ファウンデーションという全国的なNPOである。まずこの親組織を説明し



ミニ・シルバート

「カリフォルニア・マンスリー」(1990年12月号)の表紙から

ておきたい。

同ファウンデーションは、もと薬物常習者や前科者のための、全国的に有名な自助的、寄宿教育センターである。設立は70年代初頭であるが、それ以来地元のメディアはもちろん、『ワシントン・ポスト』、『ロサンジェルス・タイムズ』、『ニューヨーク・タイムズ』、『リーダーズ・ダイジェスト』、『ヘミスフィア』、『ピープル』など全国的なメディアに何度もとりあげられている。リハビリテーション組織としてはもっとも有名な団体の一つであり、代表ミニ・ハルパー・シルバート博士はこの分野ではもっとも著名な人物だといってよい。

現在、約1,000人の居住者が、ニュー・メキシコ、ニューヨーク、ノース・キャロライナ、ロサンジェルス、サンフランシスコ本部の5つの施設に別れて暮らしている。

居住者の年齢は18歳～68歳にまたがり、約4分の1が女性である。人種的には、アフリカン・アメリカン、ヒスパニック、アングロ・アメリカンがそれぞれ3分の1ずついる。平均的な居住者は10年間薬物中毒だったり、4回は刑務所に入ったことのある人たちである。その多くはギャングであり、数世代にわたって貧困に苦しんできた人たちである。約70%は裁判所で保護観察、執行猶予、あるいは有罪判決を受け、刑務所行きのかわりとして送られてきている。残りの30%は同センターへ入る前はホームレスだった。居住者の暴力的、犯罪的な前歴にもかかわらず、これまで同センターを運営した25年間に逮捕者は皆無である。かつて敵味方に別れて殺しあったギャングどうしも今ではいっしょに働き、同じ宿舎で協力して平和に暮らしているという。

平均的な居住者は同センターに入ったときは、仕事をするだけの読み書き能力や技能に欠けているが、卒業までには高卒同等の学力と3つの職業技能を修得する。同センターの滞在期間の最短は2年間、平均は4年間である。滞在期間に、居住者は学力や技能を修得するだけでなく、人間関係や社交の技術、薬物に頼らず社会のメインストリームで合法的に成功する態度、価値観、責任感をも修得する。10,000人以上の男女が卒業して社会へ復帰し、納税市民として成功している。弁護士、トラック運転手、セールスマン、医者、不動産業、機械工など。なかにはサンフランシスコ市政執行委員会委員、サンフランシスコ住宅委員会委員長、副検死官、副保安官などもふくまれている。

こうした業績をあげるのに、納税者やクライアントからの資金は1円たりとも使っていない。同センターのもっともユニークな特徴の一つは、行政からの資金やスタッフを一度も受け入れたことがないということだ。組織運営はすべて居住者が自分の人生を変えるプロセスのなかで、担当する。給料は、同財団会長をはじめ誰にも支払われない。そのかわり、同センターではすべての人が「与える人」であると同時に「受け取る人」なのだ。つ

まり、同センターは「プログラム」というよりは、「拡大家族」として運営されている。組織運営の原則「イーチ・ワン・ティーチ・ワン each one teach one」にしたがって、先輩の居住者が後輩の居住者を助けながら、共同で働く。いろいろなトレーニング・スクールはすべての居住者に職業的スキルを与えるだけでなく、稼いだお金を同財団の収入とすることで、同財団の経済的自立を可能にしている。

トレーニング・スクールには、引っ越し・トラック運送スクール、レストラン・ケイタリング・サービス、プリント・コピー・ショップ、小売り・卸売り、補助交通機関（カー・プールや相乗り型タクシーなど）、広告専門店、クリスマス・ツリーと飾り付け、そして自動車サービス・センターなどがある。コミュニティーの人たちの寄付、トレーニング・スクールの利用からも収入がある。ちなみに敷地は公共の土地を無償で借りている。サンフランシスコ本部については、改修に500,000ドルかかっただけで、もちろん人件費はいらぬ。ファウンデーションの住人が担当した。

それではライフ・ラーニング・アカデミー誕生の経緯に触れておこう。同校は「サンフランシスコ未成年更正プラン」というプロジェクトのなかから生まれた。それはいくつかの法執行機関および社会福祉機関の共同で、それまでバラバラに実施されていた未成年犯罪者の更正活動を統合するための特別委員会である。そこに招聘された犯罪学と心理学の博士号をもつシルバートの発案が同校誕生の発端となった。彼女が招聘されたのは、言うまでもなく、ディランシー・ストリート・ファウンデーションの運営に成功していたからである。

1996年11月から1997年3月にかけて、この特別委員会は未成年更正システムをどのように変えるべきかという問題について、400人以上の関係者にインタビューした。また父母、青少年、保護監察官、裁判官を集めて「模擬クラス」を開催し、参加者は何時間も保護観察の未成年者にとって「理想的な」教育の場を求めて議論した。あらゆるデータにあたり特別委員会が出した結論は、結局、シルバートが数年前に出した結論と本質的には同じものだったという。すなわち、自分が属するコミュニティーに還元できるスキルを修得すれば、前科者は社会のなかに自分の居場所を見つけることができるし、責任感と自尊心をもつこともできるというわけだ。

同特別委員会の委員の一人、サンフランシスコ市の刑事司法委員会のユージーン・クレンディネンは「刑事犯を助けるためには、とにかくサービスを与えることだと考えている人は多いでしょう」と新聞インタビューに答えている。さらに続けて「しかしじっさいに必要なのは、自分の活動にたいする責任感、いきがい、誇りです。それがあれば、彼らは



校舎建築中のディランシー・ストリート・ファウンデーションのメンバー

単に受け取るだけではなく、自分自身も更正プロセスを担っているのだと思います」と。

ライフ・ラーニング・アカデミーは、ゴールデン・ゲイト・ブリッジ近くのYMCAを校舎に1998年春の開校をめざして準備をすすめたが、じっさいにはトレジャー・アイランドの米海軍施設を校舎に同年秋の開校となった。

個人と社会との相互回復をめざす教育

キャロル・キザニアの案内で校舎内を見学した。残念ながら未成年者のプライバシー保護のため生徒の写真撮影は許されなかった。

ディランシー・ストリート・ファウンデーションでライフ・ラーニング・アカデミー担当部長をつとめるキザニアは、カリフォルニア大学バークレイ校の都市計画の修士号をもつ。その大学院時代に現在同ファウンデーションの会長をしているミニ・シルバートに



キャロル・キザニア

出会い、いっしょに仕事をするようになったという。ほかにも、州やカウンティーの公共機関で成人・未成年者の更正計画を、また警察内で訓練計画を立案した、豊富な経験をもつ。

この校舎は70年代に海軍施設としてつくられた平屋建てである。ディランシー・ストリート・ファウンデーションの建築部門が主な改修工事を請け負ったが、壁のペンキ塗りなどは生徒たちが担当した。この中を見て気に入らなかった子どもたちはペンキを塗り直すなど、自分たちで内装を仕上げた。教室の壁には生徒の絵がかかっている。キザイアは言う。「私たちは子どもたちの創意にまかせました。壁掛けの絵やフレームもすべて子どもたちのアイデアです。こういう作業を通して、生徒たちは仕事のやり方を学ぶのです」と。

私が訪れたとき、校舎の3分の2が建設中だった。99年秋には完成し、職業訓練をおこなうための教室や施設が利用可能になる。現在の教室数5を10に増やすという。建設を担当するのはもちろんディランシー・ストリート・ファウンデーションの建築部門の人たちである。その一人ロバート・シェッパーは「この仕事が楽しいかって。もちろんだぜ。いい経験させてもらってるよ。ガキどもがオレたちの真似をしないために、働いてんだからな」と答えてくれた。

トレジャー・アイランドはきわめて特殊な場所である。その元青少年センターをキャン



トレジャー・アイランドの海軍施設

パスとしたことによって、ライフ・ラーニング・アカデミーは生徒たちを地元から退去させると同時に、サンフランシスコ市からの近さや自然環境を活かして生徒にあらゆる教育の機会を与えることができる。生徒は定期的にコミュニティ組織による校外や校内の講演やプログラムに参加することによって、サンフランシスコや湾岸地域の豊かな文化的資源を利用できる。キャンパス内の公演芸術エリアの完成のあかつきには、アレグザンダー・ストリング・カルテットによる演奏や音楽レッスンをはじめ、公演芸術がカリキュラムの主要な部分となる。また生徒は毎週キャンパスでメディカル・クリニックを開く内科医や現地のメディカル・センターやクリニックとの提携による、ヘルス・ケアを受けることもできる。

その他の青少年の更正施設が都市から離れた、田舎の、しかも住宅地から隔離されたところであり、そのため自然環境以外の教育資源からも隔離されてしまう場合にくらべれば、同アカデミーの立地条件は最高である。

ライフ・ラーニング・アカデミーの生徒はサンフランシスコ統合学校区、警察、保護観察、コミュニティ組織から同アカデミーに委託された青少年である。委託されると、最初に校長ミニ・シルバートによる面接試験を受ける。この試験で、同校の集中的な学制的、職業的、社会的なプログラムへの個人的な動機、人生を積極的に変えていく決意、同校の目的が学制的な達成以上のものであることへの理解を示さなくてはならない。また入学後は、自発的に作業する決意を示さなければならない。

申請では、すでに未成年者裁判システムで判決を受けた 60 人の少年少女が、施設での集団生活のかわりに自分の意志で同校を選択することになっている。在籍期間は生徒によってことなるが、その間にグループ・カウンセリング、教科学習、レクリエーションに参加するほか、シルバートが「ライフ・スキルズ」とよぶクラスでマナー、服装など通常の社会常識を学ぶ。

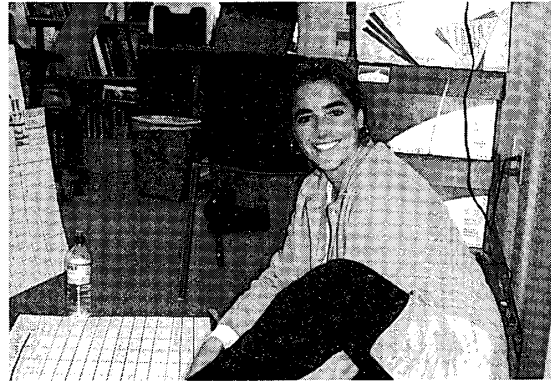
初年度の 1998 年度には 30 名の生徒が学んでいる。殺人や傷害などの犯罪者は青少年犯罪者のわずか 10% を占めるだけだが、そのような重罪の 75% は彼らによるものである。まさにこの 10% がライフ・ラーニング・アカデミーが教育しようとする生徒たちである。

ライフ・ラーニング・アカデミーで働くスタッフには、教員、職業トレーナー、生活指導者、特殊教育専門家、さらにメンターなど、生徒の必要や長時間プログラムの要求を担当するサポート・スタッフがいる。

キザイアは言う。「ほんとうに優秀な教員を揃えています。英語教員はハーバード大卒で



歴史の教員



数学の教員

教育学の修士号ももっていますし、数学教員はスタンフォード大の修士号をもち公立学校での教職経験をもち、建築史教員はエール大卒です。ほかに、判事に調停について教えてもらいます。生徒たちのなかには、挑戦的で喧嘩好きな子どももいます」と。

同校の生徒の能力は多様なので、教員は学科を教える困難な仕事をしながら、研修の機会をもつことができる。たとえば、スタンフォード大学の教員養成学科のコース(「異質な生徒からなる教室にかんするグループ研修」)を受講したり、自分たちでグループをつくり革新的なカリキュラムや学習課題をつくり、生徒の理解をサポートしている。

クラス・サイズは6人だが、たとえばリーディング力をみると、同じクラスの6人にも大きな差がある。まったく読めない子もいる。その分、教員はたいへんなので、もちろんアシスタントをつけることにしている。また、生徒たちも互いに助け合う。

メンターはすべてディランシー・ストリート・ファウンデーションの一員であるか、その卒業生である。現在学んでいる30人の生徒にたいし、30人のメンターがいる。今後生徒が200人まで増える予定なので、メンターも同数必要になるというが、同ファウンデーションがある以上心配はない。

メンターもかつて若いときに過ちを犯したが、その後ディランシー・ストリート・ファウンデーションを通して立ち直った人ばかりだ。彼らは生徒たちの問題や気持ちを理解できるし、彼らの言うことには説得力があるし、だからこそ生徒たちも彼らに耳を傾ける。「同じ経験をもたない人たちより深い理解と重い言葉を示すことができるのです」と、キザイアは言う。メンターは定期的に来校することになっているが、緊急のさいには、いつでも電話で呼び寄せられる体制をとっている。

ライフ・ラーニング・アカデミーはディランシー・ストリート・ファウンデーションにおける薬物中毒やアルコール中毒から立ち直る方法と同じ方法を基本的な教育哲学として

採用している。その方法とは、「実践から学んだことを、教えてくれたコミュニティーに還元する」という考え方である。自分に与えてくれた人たちに恩返しできることから、自尊心が生まれるというわけだ。キザイアは言う。

ライフ・ラーニング・アカデミーはディランシー・ストリート・ファウンデーションをモデルにしていますから、とてもよく似ています。それはイーチ・ワン・ティーチ・ワンという原則にもとづき、専門家を必要としません。もし第6学年のリーディング教材の読み方を知っていれば、第3学年の力しかない生徒に教えて彼らの力をひきあげます。つまり、お互いに自分の知っていることを他人とシェアすることで、お互いの力を伸ばしあうことです。

しかもこれをかなり高いレベルでまた高い期待のもとで子どもたちがおこないます。収監されたり追放されたとしても能力があることを彼ら自身に教えるために、また対外的にそれを示すためにも、こうした努力が必要なのです。

モデルにした指導的理論は「相互回復」の原理である。これは、同アカデミーの生徒がコミュニティー・サービスや個人的責任によって社会性を「回復」と同時に、これらの生徒を社会の側も役立つメンバーとして合法的に「回復」することを意味している。ディランシー・ストリート・ファウンデーションが運営する「拡大家族」では、誰もが「与える人」と同時に「受けとる人」であり、先輩が後輩や新参者を助け、みんなで仕事を分担する。またすべての人に高い期待と基準が適用されるのは、すべての人がもつ固有の才能を開発しなければならないという根本的な前提があるからだ。

それは「互酬のプロセスだ」とシルバートは説明する。「子どもたちは与えることを知らなければならない。単なる受け身であってはならない。私たちが求めているのは受け身で学ぶ生徒ではなく、自分の働きは友だち、先生、社会のためなんだということを、計画と実践を通して学んでいく生徒だ」と、彼女は強調する。

ライフ・ラーニング・アカデミーにとって本質的なことは、個人の責任感、人を信頼し人から信頼される能力、家族やコミュニティーや社会に貢献する一員になることなど、生活技能を生徒に授けることにある。生徒会が同アカデミーの校則にたいし生徒が責任をもつように維持する。校長およびスタッフの管理のもとで、これらの生徒はクラスで調停者かつ模範として活動する。日中におこる生徒の個人的、行動的問題を相談する1対1対応のスタッフもいる。人間関係の問題は週2回の男女別グループ・ミーティングで正式に取り上げられる。さらに、それぞれの生徒に割り当てられたメンターは、その生徒のチュー

ターをつとめ、リクリエーションや個人的相談にもつきあう。同アカデミーは生徒自身でリーダーシップを取り、新入生が同アカデミーの文化やプログラムに適応するのを助けることや、家庭でもコミュニティーでもコミュニティー・サービスをおこなうことを奨励している。

キザイアは言う。

いずれにしても、生徒自身に同アカデミーを運営しているのは自分たちだという自覚を持ってほしいのです。スタッフに命令されて、行動を改めたり皿洗いをするのではなく、自発的に同アカデミーを安全で快適な場所にしたいと考えて行動してほしいのです。

もし生徒の素行が悪ければ、特別ベンチへの着席を命じられ、校長の面接を受け、カウンセラーが生徒と同アカデミーとの契約を説明する。それを守らなければ、さらにトイレ掃除、皿洗いなどの役務が増える。しかし生徒を自宅に送り返すことはない。

職業に直結するプログラム

ライフ・ラーニング・アカデミーの一日は長い。生徒は早朝迎いのバンで登校し、朝8時から夜10時まで勉強したあと、送りのバンで帰宅する。この間、サポート体制が整った環境で、生徒は厳しいプロジェクトに基づく学習に参加し、各自の学年レベルの学力に追いつくチャンスが与えられる。

普通高校よりはるかに長い、1年の就学日数、1日の就学時間は、確かに、未成年犯罪がピークになる時間帯に生徒をストリートから隔離しておくことになる。しかしそれは同校の生徒を長時間拘束する本質的な理由ではない。キザイアは言う。

この国では保護監察下の未成年は家庭で学習するか、1日に2時間の登校を許されるだけです。ところが、彼らはむしろ長時間手をかけることを必要とするタイプの未成年者なのです。

同校では3食を用意する。もちろん無料だ。「ADA マネーだけでは足りませんから、民間団体から寄付を募って、食費をまかなっています」とキザイアは言う。生徒はテーブルの用意や後片づけをする。週に1、2回は自分たちで食事を作ることもあるが、学習が主

目的である以上、毎日つくることはない。もちろん料理専門のスタッフがディランシー・ストリート・ファウンデーションから派遣されている。「生徒たちは人生の中で一番おいしい食事を食べている」とそのコックは胸を張る。確かに、そうかもしれない。彼らは家庭的な暖かさを知ることなく育った生徒である。

「今日のコンセプト」の確認から、一日が始まる。私が訪れた日のコンセプトは「苦勞がなければ、進歩もない」だった。毎朝生徒はバンで登校すると、このホールに集まり、一人の生徒がこのコンセプトについてスピーチする。それを全員で聞く。

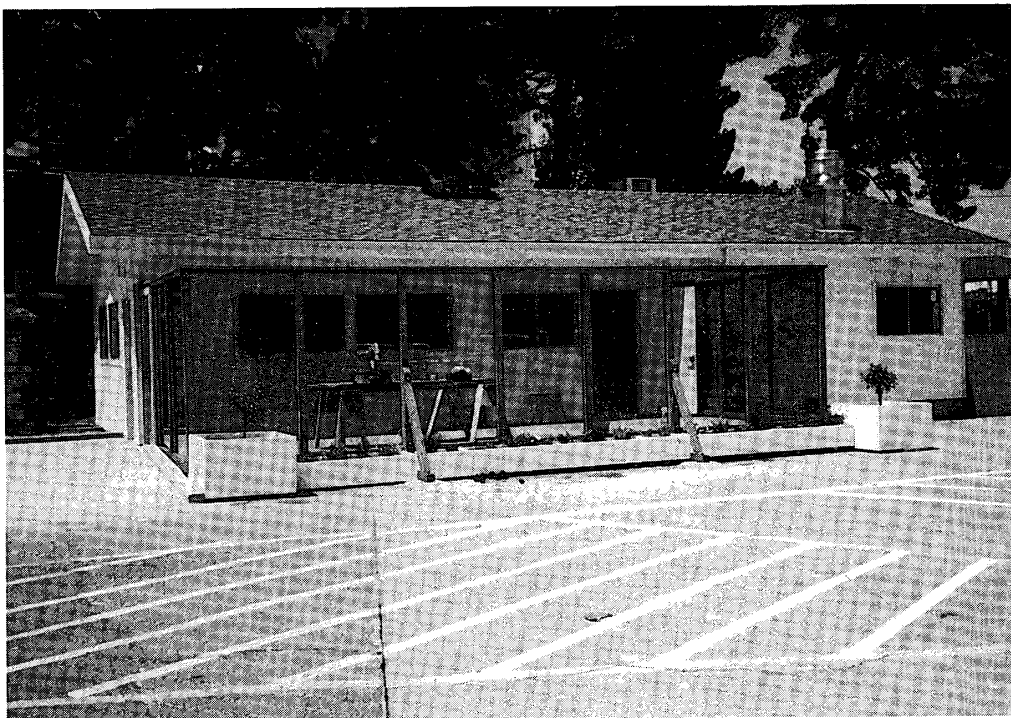
さて、同校のコースや活動はすべて4つの環境的「主専攻」のいずれかに分類され、そのうちの1つを生徒は各学期に集中的に学習する。4つの主専攻とは、「水、火、土、空気」である。主専攻がそれぞれにもっている職業的活動と学制的活動のセットが、生徒にとって4カ月間集中的に学習する分野となる。

たとえば、「水」専攻を選択した生徒は中心テーマとして水にかんする学科科目を履修し、文学では「モビー・ディック」を学び、地理学では世界が主に水と氷でできていた時代を学ぶ。さらにボート修理や航海術、体育実技では水泳やスキューバ・ダイビングなど水上スポーツを学び、海洋学や海洋生物学を学ぶ。歴史のクラスでは、カリフォルニア発展史における水の重要性について幅広く学ぶ。生徒はトレジャー・アイランド・ハーバー・マスターやサンフランシスコ海洋博物館と緊密な連携を取りながら共同作業をおこなう。

「火」専攻の生徒はすでに述べたように、「消防実習生プログラム」を履修する。歴史や科学のクラスを通して、火の科学技術的使用について過去、現在、未来を学ぶ。ファイアー・サイエンスを学び、料理法トレーニングに応用する。英語クラスでは、世界文学における火の神話的、象徴的な使用について調べる。「土」専攻の生徒は、景観建築プロジェクトに参加し、都市における造園などを学ぶ。アフリカ、アズテック、マヤ、ギリシア、ローマの建築を学び、教員と共同でカフェや学校施設を建設する。「空気」専攻のカリキュラムは目下作成中である。

現在おこなわれている授業には、数学、実験化学、英文学、作文、スペイン語、火の科学、世界の歴史と地理、エコロジー、建築史、音楽、アメリカとカリフォルニアの歴史、写真学、芸術（たとえばパフォーマンス・アートやビジュアル・アート）、そして体育実技がある。

しかし数学、科学、英語の中心教科にくわえて、生徒は「手に職をつける」というシルバート方式でいろいろな職業プログラムに参加している。たとえば、校舎近くにカフェを建設したり、その料理やテイク・アウト食品をつくり、サービスや販売など運営を学ぶ。



建設中の生徒運営のカフェ

また、バンク・オブ・アメリカの支店長やギャップのCEOをはじめ、財界の重鎮たちの講演を聴く。

同校のカリキュラムは職業技能を志向するテーマや活動を中心に組織され、実社会で必要とされる学習の総合を示す学科にまたがる。たとえば、「コマーシャル・キッチン」では、生徒がレストランでケータリング・シェフのもとで食事の用意をするが、それは学校給食のためだけでなく、生徒が建設し運営しているカフェの営業のためでもある。

チョコ・チップ・クッキー、チーズケーキ、スコーンをつくるにしても、それらを生んだ文化の歴史や伝統を調べたうえでメニューや材料を決めるため、歴史や文化的多様性についての授業が必要になるし、その授業には読み書き能力、図書館利用や文献調査やインターネットのノウ・ハウが必要になる。またハーブ栽培を学ぶと同時に、健康や栄養の知識に基づく献立を学ぶ。「カフェ」のクラスと学科クラスは在庫管理のためのコンピュータ・プログラミングを教え、数学は簿記を教え、コミュニケーションとスピーチのクラスは料理法をとまなう販売方法を教える。しかも食材となるキャベツやカリフラワーやイチゴを栽培する。

こうしたプログラムは近隣で働く人たちと生徒たちのあいだの「相互回復」の一例となる。まだ海軍の施設やテレビ・スタジオが残っており、そこで働く人たちもいる。近くにレストランはまったくないから、彼らにはカフェありがたい存在となる。花を植え道を

きれいにすることも、「良き隣人としてお互いの相互回復をはかっているのです」と、キザイアは説明する。

「カフェ」に加えて、同アカデミーには起業的、職業に直結する要素があり、生徒はそれぞれ職業的スキルへの関心に応じて選択できるようになっている。このように学科と統合された活動のうち、現在展開されているものには次ぎようなプログラムがある。

「建設業」 生徒はデザイン、校舎やカフェのデザイン、改築、修繕、また学校施設の建設を通して、建設業のスキルを修得する集中的、直接的機会をもつ。

「船舶修理」 同アカデミーはトレジャー・アイランド・ハーバー・マスター社と共同で、7隻の船舶を修理している。修理した船舶で生徒は舟の操縦法を学ぶ。加えて、生徒たちは木製の舟の完全な修復方法を学び、サンフランシスコ海洋博物館に採用されたグループとして、いろいろな舟の歴史を学ぶ。

「写真とデジタル画像」 同アカデミーは小規模営業の目的でデジタル・カメラを使い、ドキュメンタリー・プロジェクトのためにビデオ機材を使う。また、数学教育のためにポラロイド・カリキュラムを使い、さらに化学や歴史のような学科を写真プロジェクトと統合する。

「コンピューター・リタラシーと専門技術」 同アカデミーの生徒は最新式のコンピューターとインターネット・アクセスを利用する。コンピューター・トレーニングにはワーク・プロセッシング、デスクトップ・パブリッシング、ウェブサイト・デザインがある。

「消防実習生プログラム」 同アカデミーはサンフランシスコ消防署から青少年実習生プログラムとして採用されている。生徒は同アカデミーのファイアー・サイエンスを選択し、上級カリキュラムによって消防士という将来の職業の準備をする。消防実習生プログラムを修了した生徒は、修了と同時に、消防予備軍として「ジュニア消防士見習い」に正式に任命される。

生徒の態度の変わり様は、ライフ・ラーニング・アカデミーが生徒に積極的にかかわってきたことを示す。たとえば、かつて学校をドロップ・アウトした生徒が今では1日も休むことなく授業に出席している。自分の学習成果に誇りをもっている。たとえば、女生徒の1人は第3学年のリーディング・クラスにやってきたが、読むことが嫌いだったため、クラスで苦勞した。熱心に努力を続けたおかげで、著しい進歩を遂げた。自分の進歩がわかると、彼女は質問してきた。「ママに聞かせたいから、本をもって帰ってもいい？」と。

また教員の一人に「自分がどうなっているのか、よくわからないけど、とにかく生徒をやっているんだわ」と言った。同じように報われたことは、かつて公民権を奪われたこれらの青少年が新しい環境でつくりあげた絆である。たとえばセント・バレンタインズ・デイのために、英語クラスで生徒たちは愛のポエムを書いた。1人の生徒がとても感動的な詩を書いた。それを褒められると、彼は「今の言葉を書いてくれ。メンターに見せたいから」と言った。

このように理想的なライフ・ラーニング・アカデミーも問題を抱えている。キザイアは言う。

現在最大の問題は、資金の問題です。ここの生徒たちはとにかく手を掛ける必要があります。そのためのスタッフを用意することはとても高くつきます。こういう子どもたちに高いお金をかける必要があるのかという批判もありますが、彼らが「回復」し社会に出ることによって、社会もまた潤うのだと考えています。

また予想しなかった問題として、報告書や書類の提出の多いことです。これには驚きました。これまで私たちディランシー・ストリート・ファウンデーションは民間の非営利団体でしたから、官僚的な作業はほとんどありませんでした。しかし同アカデミーはチャーター・スクールという公立学校ですから、あらゆる種類の規則、検査、報告、テストがあり、これらにはすべてペーパー・ワークが伴い、比較的自由的なチャーター・スクールであっても、その仕事量の多さに驚いています。ディランシー・ストリート・ファウンデーションは単純なプログラムです。そのメンバー一人一人にファイルなどは必要ありません。写真を一度撮れば、それで終わりです。パブリック・セクターにいる以上しかたのないことですが、これらのペーパー・ワークにこれほどスタッフ、時間、お金、忍耐力を奪われるとは思いませんでした。

同校の生徒たちはギャップ・ファウンデーションから寄付されたユニフォームを着ている。同財団は、エジソン・チャーター・アカデミーに1,300,000ドル寄付したフィッシャー財団とはちがう。ギャップ社の財団である。このような制服の寄付のほかに、ギャップ社は恵まれない子どもたちや未成年者更正のための職業訓練プログラムに奨学金を出している。

参考文献

- Bonsteel, Alan & Carlos A Bonilla, *A Choice for Our Children: Curing the Crisis in America's Schools*, San Francisco: ICS Press, 1997.
- Brittain, Tom, "A 'Great Books' Charter School," *Basic Education: A Monthly Forum for Analysis & Comment*, vol.43, no.6, February 1999, pp.7-10.
- Coulson, Andrew J, *Market Education: The Unknown History* (Studies in Social Philosophy & Policy, no.21), London: Transaction Publishers, 1999.
- The Edison Project, *Annual Report on School Performance*, December 1997, 521 Fifth Avenue, 16th Floor, New York, NY, 10175, 212-309-1600.
- Gardner, Marilyn, "A Kid's Oasis Springs Up in the City: Community Activism Brings the First Playground to San Francisco's Tenderloin District," *The Christian Science Monitor*, 20 April 1995, p.13.
- GGU/LHS, "News and Updates from Golden Gate University/Leadership High School Partnership," *GGU/LHS Gazette*, Fall 1998.
- Goddess, Judy, *California School Rules: A School-Smart Parent's Guide to Advocating for Your Child*, San Francisco: School Wise Press, 1998.
- Grover-Thomas, Dee, "Minnesota New Country School," *Basic Education: A Monthly Forum for Analysis & Comment*, vol.43, no.6, February 1999, pp.11-14.
- Holmes, Madelyn, "The Future of Charter Schools," *Basic Education: A Monthly Forum for Analysis & Comment*, vol.43, no.6, February 1999, pp.1-2.
- Legon, Jordan & Michelle Guido, "After Stanford, Clintons Focus on Education, Youth," *San Jose Mercury News*, 21 Sept 1997, p.1B.
- Allman, Lysa, "Leadership High — Going to High School at the University," *San Francisco Bay View*, 17 June 1998, p.1.
- Madsen, Jean, *Private and Public School partnerships: Sharing Lessons about Decentralization*, London: Falmer Press, 1996.
- Munk, Nina, "Gap Gets It," *Fortune*, 3 August 1998, pp.
- Nathan, Joe, *Charter Schools: Creating Hope and Opportunity for American Education*, San Francisco: The Jossey-Bass Publishers, 1999 (hard cover 1996). "An Overview of the Charter Public School Movement," *Basic Education: A Monthly Forum for Analysis & Comment*, vol.43, no.6, February 1999, pp.3-6.
- The National Committee for Public Education and Religious Liberty, *School Vouchers vs Public Education: A Citizen's Anti-Voucher Kit*, 1999 Edition, P.O.Box 586 F.D.R. Station, New York, New York 10150.
- Peterson, Laura, "New School for Problem Kids Will Lean on Founder's Track Record," *The Independent*, 3 Feb 1998, p.3.
- Peterson, Paul E, et al, *Learning from School Choice*, Washington DC: Brookings Institution Press, 1998.
- Sarason, Seymour Bernard, *Charter Schools: Another Flawed Educational Reform?* The Series on

School Reform, New York: Teachers College Press, Columbia University, 1998.

The San Francisco Examiner (年代順)

- Walsh, Diana, "S.F. School Freed from State Code by Board," 23 June 1993, p.A7.
- Hardy, Charles C., "Parents Take Charge in Oakland. They'll Operate 'Charter School,' Pioneering Project That May Point Way to Better Education," 6 September 1993, p.A1.
- Ruukel, Romy, "Uniforms in Schools Won't Help," 15 September 1994, p.B9.
- Fernandes, Lorna, "The Peninsula's Unconventional Center of Learning Teachers are 'Directors' and Classrooms 'Studios' in San Carlos Charter School," 13 January 1995, p.P1.
- Schevitz, Tanya, "Berkely Parents Reinvent School Charter Program to Focus on Ability Rather Than Age," 18 January 1995, p.A4.
- Wagner Venise, "S.F. Schools Might Drop Junior ROTC Board Will Debate Phasing Out Program Because of Balboa Beating Incident," 23 June 1995, p.A25.
- Delsol, Christine, "These Schools Bring Innovation to Education Charter Programs Manage to Succeed, But Bay Area Has Only a Few of Them Who We Are," 9 February 1997, p.W18.
- Horowitz, Donna, "The Battle for Fort Baker Sausalito Parents Compete for Site with Delancy Street," 2 June 1997, p.A3.
- "Delancey Street Eyes Fort Baker Foundation Envisions Campus for Troubled Youths on park Land," 20 June 1997, p.A1.
- Guthrie, Julian, "Charter School Has Welcome Ready Clintons to Visit San Carlos This Weekend for Forum on Boosing Number of Such Schools," 19 September 1997, p.A16.
- "Clinton's Tout Charter Schools in San Carlos after Dropping Chelsea Off, They Focus on Education and Fund-Raisers," 21 Spetember 1997, p.A12.
- Walsh, Diana, "Help for Learning Disabled Teens City's Gateway High, A First in U.S., Would Serve Students from Whole Bay," 12 January 1998, p.A5.
- Examiner Staff, "Bay Datelines," 27 April 1998, p.A4.
- Haddock, Vicki & Julian Guthrie, "The City Considers Privatizing 2 Schools Proposal to Put For-Profit Edison Project in Charge Draws Praise, Fire from Parents, Teachers," 29 April 1998, p.A1.
- Guthrie, Julian, "Privatized Schools' Track Record Mixed Firm That May Run 2 in the City Is Criticized for Special Education Decisions," 30 April 1998, p.A1.
- Coile, Zachary, "Fear of Initiative Spurs Charter School Bill in Legislature Lawmakers Respond Overwhelmingly to Millionaire's Clout," 1 May 1998, p.A1.
- Salter, Stephanie, "School's Backers in the Dark on Edison," 10 May 1998, p.C1.
- Coxson, Pamela & Mary Beth Pudup, "The Edison Project: Not for Edison School," 20 May 1998, p.A21.
- Seligman, Katherine & Stephanie Salter, "Plans to Privatize School Scuttled Panel Votes Down Tenderloin Takeover," 21 May 1998, p.A1.
- Editorial, "The MCSchools Proposal The S.F. Board of Education Should Postpone Its Final Decision on a Public School to Be Operated by a For-Profit Corporation," 22 June 1998, p.A16.

- Guthrie, Julian, "Board Hands Public School to Private Firm Votes 5-2 to Let Edison Project Run Troubled Noe Valley Elementary Campus," 24 June 1998, p.A7.
- Gray, Le'Vada, "Finding Their Own Ways to Learn beyond Disability: S.F.'s Gateway High Will Celebrate Students' Different Intellectual Styles," 1 September 1998, p.A4.
- Guthrie, Julian, "School District Blasted for 'Secret' Edison Deal Expansion Built into Privatization Agreement, Say Critics," 25 September 1998, p.A6.
- "School Choice Becomes Hue And Cry for Left And Right Once a Conservative Cause, Competition for Enrollment Gets Surprising Support," 9 October 1998, p.A8.
- "Conference Calls for School Options, Including Vouchers Other Hot Topics: Charter Schools, Parental Choice," 11 October 1998, p.D1.
- "The Fisher King S.F.'s Edison School, with Additional Funds from the GAP's Don Fisher, Has Been Criticized by Many Groups. Now, Will It Improve?" 18 October 1998, p.M6.
- "School Brings Hope to Tough District: Tenderloin Campus for Kindergarten through 5th Grade," 30 November 1998, p.A1.
- "Union Says Edison Teachers Underpaid Slightly Higher Salaries Don't Make up for Extra Hours Worked, Grievance Claim Contends," 1 December 1998, p.A8.
- "Charter School Study Finds No Benefit Students not Doing Better Than Those in Traditional Classes," 3 December 1998, p.A4.
- Saladay, Robert & Zachary Coile, "Davis Embraces Wilson Themes Better Schools, More Cops Highlight Speech," 7 January 1999, p.A1.

- 鶴浦 裕「クリエイティブ・アーツ・チャーター・アカデミー—手作りの小さなチャーター・スクール」, 札幌大学『経済と経営』, 第30巻, 第1号, 1999年6月, pp.259-87.
- 「テンダーロイン・コミュニティー・スクール—チャーター・スクールを辞退し, CBOをめざす従来校—」, 札幌大学『経済と経営』, 第30巻, 第2号, 1999年9月, pp.245-284.
- 「ゲイトウェイ・ハイスクール—学習障害児のためのチャーター・スクール—」, 札幌大学『札幌大学総合論叢』, 第8号, 1999年10月, pp.17-38.
- 「エジソン・チャーター・アカデミー—民間企業が運営するチャーター・スクール—」, 札幌大学『札幌大学総合論叢』, 第8号, 1999年10月, pp.39-62.
- 「リーダーシップ・ハイスクール—私立大学との提携により高大一貫教育をめざすチャーター・スクール—」, 札幌大学『経済と経営』, 第30巻, 第3号, 1999年12月(印刷中).
- 「チャータースクール—来るか, 起校家の時代—」, ソフト化経済センター『月刊ソフトノミクス』, 2000年2月号, pp.9-11.
- 「カリフォルニア州のチャーター・スクール制度とサンフランシスコ統合学校区」, 札幌大学『札幌大学総合論叢』, 第9号, 2000年3月(印刷中).

追記 資料収集については札幌大学図書館のスタッフからご協力いただいた。記して感謝したい。